

令和元年度「高校生のための学びの基礎診断」の活用状況について

認定事業者	対象 教科	測定ツールの名称	実施校数	受験生徒数
(株)学研教育みらい	3教科	基礎力測定診断 ベーシックコース	103	10,064
(公財)日本数学検定協会	数学	実用数学技能検定 3級	1	75
		実用数学技能検定 準2級	1	74
		数検スコア基礎診断 数I・数A(項目別診断)	0	0
		数検スコア総合診断 数I・数A	0	0
(株)Z会ソリューションズ	英語	英語CAN-DOテスト レベル2	—	—
		英語CAN-DOテスト レベル3	—	—
(株)リクルートマーケティング パートナーズ	3教科	スタディサプリ 学びの活用力診断 I・II～ベーシッ ク～	27	11,265
		スタディサプリ 高1・高2 学びの活用力診断～スタ ンダード～	32	15,051
(株)ベネッセコーポレーション ※受験生徒数については「延べ 数」である。	3教科	進路マップ 基礎力診断テスト	510	157,830
		進路マップ 実力診断テスト	1,457	530,566
		スタディーサポート α タイプ、 β タイプ、 θ タイプ	590	238,344
		スタディープログラム	92	66,313
		ベネッセ 総合学力テスト	3,621	2,877,565
	国語	Literas 論理言語力検定 3級	—	—
		Literas 論理言語力検定 2級	—	—
	数学	ベネッセ数学理解力検定	—	—
	英語	GTEC Advancedタイプ・Basicタイプ・Coreタイプ	—	—
	ブリティッシュ・カウンシル	英語	Aptis for Teens (アプティス フォー ティーンズ/中高生向けAptis)	0
ケンブリッジ大学英語検定機構	英語	ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools(PB/CB)	0	0
		ケンブリッジ英語検定4技能CBT (Linguaskill リンガスキル)	0	0
(株)教育測定研究所	英語	英検IBA TEST C 4技能版	0	0
(公財)日本漢字能力検定協会	国語	文章読解・作成能力検定 4級	55	4,160
		文章読解・作成能力検定 3級	111	6,586
		文章読解・作成能力検定 準2級	99	4,618

※数値は「高校生のための学びの基礎診断」として認定を受けた測定ツールを利用した実実施校数及びその学校の実受験生徒数を示している。

※実施校数及び受験生徒数について、認定事業者が非公表としている情報は「—」としている。

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：学研教育みらい

測定対象ツール：基礎力測定診断ベーシック

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

103校 10,064名 年 3回実施

・試験実施後の検証内容

作問委員会での検討を行う。試験実施後、集計されたデータと問題を見比べ、小問毎の正答率について、学校平均や全国平均と比較しながら、問題の妥当性について作問委員と話し合いをもった。生徒の学習項目の定着率をみながら、出題の仕方について、より生徒の学習意欲を向上させるような出題の仕方はないか話し合う場を設けて検討している。

(検証項目)

1. 個々の小問に対する正答率
2. 個々の大問に対する正答率
3. 問題全体に対する正答率
4. 選択問題における正答率のバランス

正答率が低いものについては、受験者グループの定着に帰するだけではなく、出題方法の在り方としてどうであるべきか議論を行っている。採点基準については、毎回、作問委員で討議しながら進めている。

・今後の改良の方向性

基礎学力の定着率が低い層では学習進度がそう速くないため、履修状況に応じた出題を行う。

【数学】2次関数以降の定着率は極めて低く、履修状況も2学期中になかなか行えない学校が多かった。そこで、改めて出題内容について検討した結果、履修状況に応じてより弾力的な運用が行えるように選択問題を増やすこととしている。

【英語】高校生にとって英作文のテーマがどのようなものであると書きやすいのかを採点者会議で検証した。特に、日常であり得る題材を用いて、かつ「次の4つの中から選び、それについて答えよ」という形式で、受験者がこれなら書けると思えるものを自ら選択できるような問題とする。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

コロナ禍においては、年明け第3回の実施を自宅受験で行ったケースもあり、CBTによる運用の必要性も強く感じた次第である。開発、運用も含めてこれからではあるが、検討している。

・IRT 導入に向けた展望・検討状況

受験者の母数も十分とは言えず、かかる費用や問題用紙の受験終了後の回収についても議論が分かれるなど、IRT の導入にはまだ課題が山積している。検討に入るまでに至っていない状況である。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

検討は進んでいない。

・その他特記事項

英語スピーキングテストについて、現在は問題の提供・解答例・採点基準の提出により、猶予されている状況である。当初は、学校での実施手順、録音機能を持つデバイスの選定、採点者の手配、採点方法まで含めて検討。しかし、かかる費用、実施から結果を戻すまでの一連の運用に多大な費用と労力がかかることから、実施に踏み切るまでには至っていない。実際、学校現場からの要請もほとんどなく、2019年度は学校実施によるスピーキングテストの成績処理要請は1件のみであった。学校現場からの反応の薄さと費用増に対する反発についても想像ができるため、スピーキングテストについては保留中である。

○指摘事項への対応

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしながら、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<p>○学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか</p> <p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論理的文章（評論）では、筆者の主張やその根拠、表現の意図を的確に捉えることができる能力を測定する。 ・文学的文章（小説）では、場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化について、描写をもとに捉え、読み味わうことができる能力を測定する。 ・古文では、平易な古文の文章について、文語のきまりを理解しながら、文章の内容を捉えることができる能力を測定する。 ・漢文では、平易な漢文の文章について、漢文のきまりを理解しながら、文章の内容を捉えることができる能力を測定する。 ・複合的文章では、詩歌や古文などを含む評論等、複合的な文章を読み、筆者の主張や表現の意図を捉えることができる能力を測定する。

【数学】

基礎学力の定着を最大の目標として、義務教育段階での知識・技能が確かに身についているかを測定する。

・数と式の計算では、数の四則計算や整式の計算や因数分解、方程式などの基礎的な計算や処理を正しく行うことができるかを測定する。

・関数では、1次関数や2次関数を題材として、式やグラフを相互に関連づけて理解しているかを測定する。

・図形では、図形の基本性質や角、線分の長さ、面積、体積の計量などを正確に行うことができるかを測定する。

・数と式では、無理数の計算や式の計算、式変形などが正確に行えるかを測定する。

・2次関数では、2次関数についてグラフを考察し、値の変化の様子をグラフを通じて調べることができるかを測定する。

・三角比では、三角比の意味と相互関係を理解し、三角比を図形の考察に活用できるかを測定する。

【英語】

・リスニングでは、英語を聞く能力と、質問の内容を理解し、適切な応答ができる能力を測定する。

・語彙では、高校1年生として覚えておきたい単語を出題し、語彙力を測定する。また、場面状況にあった対話になるように空所に単語を補充する問題を出題し、どのような場面で対話が行われているのかを把握する力を測定する。

・文法・語法では、高校1年生として知っておくべき中学学習範囲の英文法の理解度を測定する。

・読解では、英文の内容を確認する問題を出題し、英語の読む能力を測定する。また、与えられた情報から問題の答えを検索する能力を測定する。

・英作文では、文法の理解度だけでなく、与えられた場面と対話の応答の両方からどのような発話が行われているのかを推測する能力を測定する。また、

場面設定とイラストを見て、そのイラストに描写された人物の心情をくみ取り、その人物になりきって15～25語の英文を書き、英語で表現する能力を測定する。

○その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切か

【国語】

・高校1年生に身近な内容の文章を素材として出題することを意識する。

・古文・漢文は事前事後学習教材との連動を意識し、生徒がPDCA サイクルを回す中で学力を向上させられるような出題を目指す。

【英語】

高校1年生に身近な内容の文章を素材として出題することを意識する。イラスト内にもう少し記述時の参考となるようなキーワードなどを提示して取り組みやすい出題を目指す。

【数学】

基礎学力の定着を最大の目標として、義務教育段階での知識・技能が確かに身についているかを明確に診断するために、おもに単問や小問形式を中心に測定する。また、「基礎学力の運用を主体とした思考力・判断力・表現力」の有無を測定するものとして、「記述式問題」を出題の中心としている。

○主な質疑応答

英語のスピーキングの今後の見通しについて、実施にかかる学校側の手間、弊社側の費用とそれに伴う学校側の追加負担を考慮すると、スピーキングテストの運用は難しい。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：公益財団法人 日本数学検定協会
測定対象ツール：実用数学技能検定 3級
実用数学技能検定 準2級

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

2019年度

実用数学技能検定 3級 1校 75人 ※年17回実施

実用数学技能検定 準2級 1校 74人 ※年17回実施

・試験実施後の検証内容

毎月1回弊会内部で検定問題等に関する会議を開き、検定問題の内容や質について検討している。外部の調査会社に検定結果に関する分析を委託し、各回の検定問題の水準が一定に保たれているか検証している。受検者に対するアンケートにより検定時間の適否、問題の難易を調査している。

・今後の改良の方向性

毎月1回弊会内部で検定問題等に関する会議を開き、問題の内容や質、短答式、記述式等の出題形式について検討し、時代に合った検定となるよう問題の改善を重ねている。また、毎回実施している受検者に対するアンケートの結果を参考に改善を加える。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

ICT機器の学校への導入が早まる可能性に鑑みて、検定のCBT化について、問題の配信や解答の回収を含めて検討している。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

外部の調査会社に委託して、IRTを使って個々の問題が適切であるかということを検証できるよう検討している。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

ある一定水準の数学力を持った受検者を合格者として認定するという検定としての特性から、適応型テストを導入する予定はない。合格した者は上の階級に挑戦し、不合格であった者は再度同じ階級に挑戦したり、

下の階級を受検したりすることで対応することになる。

- ・その他特記事項
特になし。

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校学習指導要領との関連に留意し、問題ごとに測定しようとする資質・能力の具体的内容を定めています。 学習指導要領の改訂を十分に考慮し、測定しようとする資質・能力を再検討し必要に応じて変更を加えることとしています。 ・測定する資質・能力に応じて出題内容・方法を定めています。1次：計算技能検定では計算問題を中心に主として知識・技能を測定する問題を出題しており、解答方法は短答式としています。2次：数理技能検定では思考力・判断力・表現力を測定することを重視する問題は記述式として出題しています。 ・検定問題の出題内容・方法に関しては、これまでも独自性を保ちつつ学校現場の意見を取り入れて改善してきました。今後も学校現場の意見を十分に踏まえて、時代に合った検定となるよう改訂を加えていきます。
<p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。</p> <p>特に、新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度を正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「～できる」の記述文による</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1次：計算技能検定では主として知識・技能を測定し、2次：数理技能検定では主として思考力・判断力・表現力を測定します。 ・診断結果として個別成績票と団体別成績票を発行し、学校を通じて紙媒体により返却しています。 ・個別成績票には、小問ごとに問題の内容と個人の得点、全体の正答率を提示し、全体と比較してよくできた問題、課題が見られた問題を色分けして示しています。また、学習指導要領に沿って内容別に正答率を提示していますので、学習内容ごとの定着度

<p>評価を示すなどの工夫を検討することが望ましい。その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行うことが望ましい。</p> <p>また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」などの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。</p>	<p>合いがわかりやすい構造になっています。これらは表やグラフで表示していますが、総合的な評価コメントは記述文による評価を成績別及び学習内容別に、不合格者には復習すべき内容を、合格者には次に学習すべき内容を示し、検定受検後の学習に役立つよう工夫しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団体別成績票には誤答類型に基づいた答案の分析を掲載していますが、個別成績票では誤答類型に基づいた学習のアドバイスはしていません。今後の検討課題とします。 ・合格者に対しては1階級上の準2級の問題を、不合格者に対しては3級の復習問題を提示して、事後の学習に役立てられるようにしています。 ・団体別成績票は、学校単位での成績を提供しています。団体と全体の合格率及び平均点の比較や、団体の得点分布、内容別正答率等の成績を表及びグラフで示しています。評価コメントは学習内容別に記述文によって示し、検定受検後の指導に役立てることが出来ます。また、特定の問題に対して予め解答類型を定めて採点し、主要な類型とともに反応率を示すことにより誤答の傾向がわかるので、指導に生かすことが出来ます。 ・学習教材については、弊会で発行している「要点整理」シリーズの問題集が学年対応（1教材が2～3学年に対応）となっており、予習復習に適しています。 ・学校等には加工可能なCSV形式で受検者の小問ごとの得点を提供しています。 <p>団体の経年変化を示すデータは提供していません。今後の検討課題としています。</p> <p>結果に関する分析会も実施していませんが、分析結果を実施校に提供したりホームページ等で公開したりすることを検討しています。</p>
<p>高校生の基礎学力の定着を目的とする基礎診断制度の趣旨に照らすと、生徒の学力の推移を可能な限り正確に把握することができる必要がある。このため、単に経験則によるのではなく、統計的指標などを</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月1回弊会内部で検定問題等に関する会議を開き、検定問題の内容や質、及び全国学力・学習状況調査の調査問題等について研究し、時代に合った検定となるよう問題の改善を重ねています。

用いて各回の試験で難易度が安定しているか否か（信頼性）の検証や測定内容の妥当性をテスト理論の観点から行うなど、不断の検証・改善に努めることが望ましい。

できるだけ多くの生徒が受検しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受検料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。

・外部の調査会社に検定結果に関する分析を委託し、各回の検定問題の水準が一定に保たれているか検証しています。1次：計算技能検定の問題の内容はほぼ一定で短答式であることから、分析しやすく、水準が安定していることがわかっています。2次：数理技能検定については、全体の問題数が少なく、回次ごとの出題内容が数種類のパターンには分類できるものの一定ではないため分析が難しく、調査結果は未だ出ていませんが調査を継続していきます。

・2次：数理技能検定は、記述式の問題があり、また短答式でも部分点が生じる問題が多く、多くの採点者と採点時間が必要なため、低廉な価格で実施するには、問題の構成等多くの変更を加えなければなりません。現在の問題構成の良さを考えると早急に変更する予定はなく、価格を下げることは検討していません。しかし、受検しやすさという観点から、低廉な価格であることは重要ですので今後の検討課題とします。

・受検者5人以上で団体受検ができるよう定めていますが、島嶼・山間部の学校や小規模校、障害のある生徒の受検に関しては人数の下限を設けていません。

経済的に困難な事情のある生徒への配慮については、教育委員会の補助による受検、校長裁量による公費での受検といった例はありますが、弊会では特別な配慮はしていません。

○主な質疑応答

(質問)

テスト全体のスコアは問題が変わっても安定的、定量的に信頼性を算出して検討しているのかという点について、外部の調査会社に委託し、1次検定についてぶれはないことが分かっている。2次検定に関しては、月間、年間を通してみると有意差はない。1回ごとの検定について、今後調査会社と検証していく。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」

(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：公益財団法人 日本数学検定協会

測定対象ツール：数検スコア基礎診断 数I・数A(項目別診断)

数検スコア総合診断 数I・数A

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

2019年度に実施した学校はなかった。2018年度も実施校はなかった。

・試験実施後の検証内容

誤答のデータが集まり次第、個々の問題に対して、正答率や解答内容を踏まえ、問題の内容や質、出題形式について検討する。CBTで実施するため、短答式問題及び記述式問題双方に関して、解答の入力ミス等について検証する。

・今後の改良の方向性

学習指導要領の改訂を考慮して、測定する資質・能力について検討し問題等に変更を加える。入力ミスに関しては、入力方法の指示を見直す等、受験者の不利にならないように改善する。CBTのよさが失われない範囲で記述式の問題を増やすことを検討する。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

CBTで実施している。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

診断分析においては、個人、クラス的能力をIRT同等もしくはそれ以上の項目別分析ができる手法を用いているので、IRT導入の予定はない。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

オリジナルの分析手法により、適応型テストと同等、それ以上の分析手法を用いて個人能力、クラスの理解度を分析しているため、適応型テストの導入の予定はない。

・その他特記事項

特になし。

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校学習指導要領及び中学校学習指導要領との関連に留意し、問題ごとに測定しようとする資質・能力の具体的内容を定めています。 学習指導要領の改訂を十分に考慮し、測定しようとする資質・能力を再検討し必要に応じて変更を加えることとしています。 ・測定する資質・能力に応じて出題内容・方法を定めています。主として知識・技能を測定する問題は短答式、選択式としています。思考力・判断力・表現力を問う証明問題については記述式とし、解法の過程を観ることを重視しています。 ・CBTでの実施のため、選択式、短答式の問題に関しては自動採点が可能ですが、記述式の問題の採点は目視で行っています。採点効率を考慮したうえで、今後記述式問題を増やすことを検討しています。 ・記述式問題の解答の入力については、項目別診断の前に行うWEB分析及びチュートリアルで入力方法を示しており、入力の技術で成績に差がでないよう配慮しています。冪乗、三角比等の数式の入力も可能です。分数、平方根の入力については教科書等の記述とはやや異なりますが、実証実験では入力についての質問・意見等はありませんでした。新規に開発したツールであることもあり、今後も学校現場の意見を取り入れ改善していきます。
<p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。</p> <p>特に、新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・診断結果については、個別成績票と団体別成績票を発行し、学校を通して電子データにより返却しています。 ・個別成績票には、受検者個人の総合点、WEB分析の総合点、項目別診断の総合点と、それらに対するコメントを総評として記述文で示します。また、指導者が選択した診断項目のWEB分析及び項目別診断の得点

が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度合いを正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「～できる」の記述文による評価を示すなどの工夫を検討することが望ましい。その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行うことが望ましい。

また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」などの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。

を一覧表とレーダーチャートで提示し、定着した項目、課題が見られる項目がわかりやすくなっています。さらに、診断項目の下位にある学習項目を細分化した学習要素（それぞれの学習項目の問題を解くために必要な内容を要素として分類したもの）に対する得点とコメントを提示します。コメントは記述文で示され、定着した内容や課題が多くみられた内容、復習のポイントがわかりやすくなっています。

- ・誤答類型に基づいた学習のアドバイスはしていません。今後の検討課題とします。

- ・団体別成績票は、クラスごとや学年ごとなど実施校側で定めたグループごとの成績を提供することができます。学習項目の平均や学習達成度、受検者の得点の分布などをグラフ表示します。また、総合評価で、団体の傾向、課題が多くみられた分野、授業改善のポイントについて記述文で評価を示し、診断実施後の指導に役立てることができます。

- ・教材については、予習用と復習用のものが考えられます。

数検スコア基礎診断には、授業の予習復習のための教材としてWEB分析が組み込まれています。また、項目別診断を実施したあとの復習用の教材としては、弊会で発行している「要点整理」シリーズの問題集が活用できます。

- ・団体の経年変化を示すデータや加工可能な形での結果データについては、現在のシステムでは構築されていないので提供できません。今後の検討課題とします。

- ・解答類型に基づいた指導のアドバイスはしていません。また、結果に関する分析会は実施していません。これらについては、誤答のデータが集まり次第分析して、誤答の傾向を公開するなど事後の授業改善に役立てることができるような方法を検討します。

<p>高校生の基礎学力の定着を目的とする基礎診断制度の趣旨に照らすと、生徒の学力の推移を可能な限り正確に把握することができる必要がある。このため、単に経験則によるのではなく、統計的指標などを用いて各回の試験で難易度が安定しているか否か（信頼性）の検証や測定内容の妥当性をテスト理論の観点から行うなど、不断の検証・改善に努めることが望ましい。</p> <p>できるだけ多くの生徒が受検しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受検料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習項目を細分化した学習要素を用いて絶対評価で判定する形式をとっています。問題ごとに関連する学習要素に重み付けをして登録しています。また1つの学習要素は複数の学習項目に属します。そのため、テストごとの評価のぶれは最小限に抑えられています。 ・登録する問題を増やし、そこから問題を任意に抽出して診断テストを構成することにより、更に信頼性が高いツールとして仕上げていく予定です。 ・団体ごとに申し込み人数の1割にあたるIDをサンプルとして無償で配付しますので、経済的に困難な事情がある生徒等に対して、学校の配慮で自由に活用することができます。
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

○主な質疑応答

特になし。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：株式会社Z会ソリューションズ

測定対象ツール：英語 CAN-DO テスト レベル2・3

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

【レベル2】実受検者数：認定事業者が非公開としている(2019年度)

【レベル3】実受検者数：認定事業者が非公開としている(2019年度)

・試験実施後の検証内容

1.具体的な検証方法

「聞くこと」「読むこと」のスコアは、試験実施前に数百名規模のモニター調査を実施しているため、その段階で各問題の妥当性・信頼性の検証を行っている。まず、古典的テスト理論、因子分析により、問題ごとの難易度調整、差替・修正などを行い、その後、IRTの統計処理を行うためのデータ収集・検証を、社外の監修者等とともに実施している。

試験実施後には、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」のスコア分布等の分析を社外の監修者等とともにを行い、外れ値・異常値に対しての要因を検証している。

2.具体的な検証項目・内容

「話すこと」「書くこと」については、本測定ツールの受検を通して得られた解答データ・採点データの機械学習や統計処理を行い、得られたデータから、問題内容、採点基準、採点者の採点品質を検証している。

・今後の改良の方向性

本テストはCEFR-Jのディスクリプタに準拠した問題内容となっているため、受検データの分析を通して、CEFR-Jのレベルごとの特性抽出、その特性から受検者へのフィードバックの具体化、受検前後の指導・学習サービスの改善につなげている。

あわせて、団体受検者には受検後にアンケートを実施しているため、成績表の改善、CBTシステム等の一連の受検の流れの改善を行っている。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

CBTでの受検がすでに可能。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

IRTをすでに導入。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

適応型テスト導入に向けて、Z会グループ内ではアダプティブ・ラーニングサービスをすでに実施。その知見をもとに、本測定ツールへのアダプティブ・テストの導入も、受検者データの検証を行いながら、中長期的には検討予定。

・その他特記事項

特になし

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切か <p>を明確にしなが、検討することが望ましい。</p> <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<p>『英語 CAN-DO テスト』は、各問題に「CAN-DO リスト」に基づいた「タスク」「テキスト」「条件」が設定されており、CAN-DO の示している「できること」がどのくらい、どの程度できるのかを測定できるテストです。また、その測定にあたっての出題内容・方法については、CEFR-J の開発者である投野由紀夫先生（東京外国語大学教授）を監修者にお迎えし、学校現場のご意見も十分に踏まえながら、その妥当性を検証しています。</p>
<p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。</p> <p>特に、新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度を正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「~できる」の記述文による評価を示すなどの工夫を検討することが望ましい。その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行</p>	<p>『英語 CAN-DO テスト』では、技能ごと、英語で何ができるようになっているか、次のレベルではどこを伸ばすとよいかをフィードバックされます。学習指導要領でも示されている CAN-DO 視点でのフィードバックのため、授業の理解度が把握しやすく、今後の対策も行いやすい内容です。</p> <p>《結果提供の具体的な内容》</p> <p>【受検者個人】</p> <p>個別成績表を提供。</p> <p>総合スコア／総合評価（CEFR-J レベル）／技能別スコア／技能別評価（CEFR-J レベル）／スピーキング、</p>

<p>うことが望ましい。</p> <p>また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」などの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。</p>	<p>ライティングの観点別評価／「～できる」の記述文による学習アドバイス／成績推移</p> <p>【学校等】成績一覧のエクセルデータ、団体全体での成績傾向などをまとめた報告書を提供。</p> <p>学級・学年別などの概況・分析結果（平均点、得点分布、相関関係など）、課題が多く見られた分野、経年変化など</p>
<p>《試験内容の不断の検証》</p> <p>高校生の基礎学力の定着を目的とする基礎診断制度の趣旨に照らすと、生徒の学力の推移を可能な限り正確に把握することができる必要がある。このため、単に経験則によるのではなく、統計的指標などを用いて各回の試験で難易度が安定しているか否か（信頼性）の検証や測定内容の妥当性をテスト理論の観点から行うなど、不断の検証・改善に努めることが望ましい。</p> <p>《低廉な受検料》</p> <p>できるだけ多くの生徒が受検しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受検料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。</p>	<p>《試験内容の不断の検証》</p> <p>『英語 CAN-DO テスト』は、モニター試験を通して、各技能、各問題項目の難易度を設定しています。また、リスニング、リーディングは IRT（Item Response Theory：項目応答理論）といわれる統計処理を行ってスコアを算出します。複数回・複数レベルのテストを受検しても同じ指標でスコアを比べることができます。</p> <p>《低廉な受検料》</p> <p>『英語 CAN-DO テスト』は下記の価格でご受検いただけるため、日常の学習の指針にお使いいただけます。</p> <p>【CBT（全技能）】団体：3,900円（税抜）／一般：4,680円（税抜）</p> <p>【PBT（S以外）+CBT（S）】団体：4300円（税込）</p> <p>※一般受検はナシ</p>

○主な質疑応答

認定を受けてから教育委員会、学校に対しての働きかけについて、「英語 CAN-DO テスト」のパンフレットを「高校生のための学びの基礎診断」に認定された旨を記載している。学校が採用を検討される際には、認定の有無というよりは、学校も指導と評価を一体化させたいというような課題をお持ちで、その解決のために本テストを採用いただいている傾向がある。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
 (令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
 測定対象ツール：スタディサプリ 学びの活用力診断～ベーシック～
 スタディサプリ 学びの活用力診断～スタンダード～

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

ベーシック : 27校 11,265人 ※年1回実施
 スタンダード : 32校 15,051人 ※年3回実施

・試験実施後の検証内容

信頼性係数は0.7~0.95程度であったことから、信頼性は比較的高いと言える。また、作問委員会によって結果データを踏まえた教科ごとの検証を行っており、それを踏まえて次年度の作問に反映をしている。実施校の先生方からのヒアリングも営業を通して行い、その結果を難易度や実施時期についての企画に反映している。

・今後の改良の方向性

2020年度はベーシック・スタンダードともに前期/後期の設定とし、通年で受けることが可能な設計としている。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

学びの活用診断については2022年度以降は販売停止となるため、同社の他アセスメントにて研究を進める。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

学びの活用診断については2022年度以降は販売停止となるため、同社の他アセスメントにて研究を進める。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

学びの活用診断については2022年度以降は販売停止となるため、同社の他アセスメントにて研究を進める。

・その他特記事項

特になし

○指摘事項への対応(指摘を受けたものについてお答えください。)

指摘事項	対応状況
新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、 ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討するこ	どのような資質・能力測定するのか定義をしたうえで、各問題についてどの能力を問うているか明確に定めて作問している。どの能力を問うているのかは採点基準で明示をしている。 事後検証については、営業メンバー経由でヒアリングを行い、学校のお声を踏まえて翌年の作問に生かした。

<p>とが望ましい。また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	
<p>2021年度までの間の国語、数学及び英語の3教科セットの測定ツールにおける英語の「話す」技能に関しては、測定することに代えて問題、解答例及び採点基準を提供することとしても差し支えないこととしているが、英語4技能のバランスのとれた育成・評価を促進する観点からは、将来的な4技能測定機能の具備に向けた「話す」技能測定に関する技術開発や環境整備を行うことが望ましい。</p>	<p>「話す」技能に関して、19年度はツールの提供に留まった。</p>
<p>学校における「話す」技能に関する試験の実効性を高める観点からは、問題、解答例及び採点基準に留まらず、実施マニュアル（試験の運営例など）、得点ごとの応用例、採点研修用ツール等が提供されることが望ましい。</p>	<p>「話す」技能の測定ツールとして、先生用実施マニュアル・生徒用実施マニュアル・先生用問題シート・生徒用問題シート・採点基準と解答例、得点ごとの応答例・生徒用解答例・成績表を提供した。</p>
<p>出題内容・形式について、複数の審査員から、測定しようとする資質・能力を明確にしてから、試験の出題内容を設定しているというよりは、既存の試験問題を転用しており、学習指導要領を十分に踏まえたものとなっていないのではないか等の厳しい指摘があった。</p> <p>この指摘を踏まえ、学習指導要領の趣旨や高大接続改革の方向性に合った出題内容・形式となるよう強く望む。</p> <p>なお、学習指導要領で育成しようとする資質・能力や学習指導要領の関連項目を明確にしつつ設計された試験としては、大学入学共通テストの試行調査や、学校段階は異なるものの、全国学力・学習状況調査があり、これらの出題内容等も参考にすることが考えられる。</p>	<p>出題内容・形式については、共通テスト試行調査（プレテスト）の出題内容を参考に作問している。国語では、複数の資料から解答する問題、イラストを見て解答する問題を導入している。数学では、日常の広い話題から数学の知識を使って問題を解決する場面を設定して解答させる問題、教室など学校の一場面から切り出した状況設定での作問、また、あえて間違った発言を言う生徒を設定し、その間違いを見つけさせるなどの工夫もしている。英語では、全て日本語を介さず、英語の問いを英語で解答する問題にしている。</p>
<p>英語の出題内容について、複数の審査員から、例えば、単純な英文和訳・和文英訳の問題や文章等の理解を日本語の記述式で問う問題等が散見されるなど、英語単教科の測定ツールに比べて、学習指導要領が求める、4技能を測定するツールとしては不十分ではないか、英語教育改革の方向性を十分に踏まえたものとなっていないのではないかとの指摘があった。受検者層の学力等も踏まえつつ、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて」英語で表現する力を測定する問題の工夫や、複数の技能を活用する問題など、新学習指導要領が進めようとしている高等学校及び中学校における指導の改善の方向性を踏まえた出題内容の改善を望む。</p>	<p>ご指摘を踏まえ、単純な英文和訳・和文英訳の問題や、文章などの理解を日本語の記述式で問う問題等は一切出題していない。</p>

<p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。</p> <p>特に、新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度合いを正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「～できる」の記述文による評価を示すなどの工夫を検討することが望ましい。その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行うことが望ましい。</p> <p>また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」などの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。</p>	<p>結果提供の具体的な内容について、受検者個人に対しては、学校を通じた紙媒体にて、学習内容の定着状況、スコアに加え、誤答に対応した学び直し用講義動画、全問題に対応した解説動画を提供した。</p> <p>学校に対しては、紙媒体、学校専用 WEB サイトを通し、学級・学年別の概況・分析結果（平均点、得点分布、課題が多く見られた分野、経年変化など）、設問に対しての事後指導用のアドバイス、指導提案や、生徒向けに配信ができる復習問題・講義動画などを提供いたし、結果に関する分析会の実施も行った。</p> <p>観点別評価については、各問題について問うている資質・能力を明確に定めて作問しており、また、各資質・能力を各教科でどのように定義しているかを明確に示している。</p>
<p>基礎診断の認定基準の一つとして、「試験等の結果（正答状況やスコア等）に対する全体及び領域等毎の評価（ルーブリックに基づく段階表示をはじめとした「～できる」の記述文による評価など）の考え方や分析の手法を明らかにしていること」を求めているが、英語の領域等毎の評価としては、4技能のバランスのとれた育成に資するものとするのが望ましい。</p>	<p>2019 年度は、小問単位での「～できる」記述分による評価を実施いたしましたが、全体及び領域単位での評価は実施できていない。</p>
<p>高校生の基礎学力の定着を目的とする基礎診断制度の趣旨に照らすと、生徒の学力の推移を可能な限り正確に把握することができる必要がある。このため、単に経験則によるのではなく、統計的指標などを用いて各回の試験で難易度が安定しているか否か（信頼性）の検証や測定内容の妥当性をテスト理論の観点から行うなど、不断の検証・改善に努めることが望ましい。</p>	<p>主に定性的な分析をもとに生徒の学力の推移の把握について努めていますが、より積極的な統計的資料の利用・テスト理論の観点からの検証は、他アセスメントにおいて今後検討を進めていきます。</p>
<p>できるだけ多くの生徒が受検しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受検料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。</p>	<p>できうる限りの低廉な価格設定をした。</p>

○主な質疑応答

知識・技能に偏重しているように見えるが、動画と連動させることによってテストの結果、診断の結果の改善につながるのかという点について、現状のスタディサプリの講義にひもづけている部分は、知識・技能において欠如が見られる場合であり、思考力・判断力・表現力に関する部分については、すべての問題に対しての解説を新規で撮影している。その問題の中でどういったことが問われているのか、それに対してどういった考え方ができるのかを解説している。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
 (令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：株式会社ベネッセコーポレーション

- 測定対象ツール：①進路マップ 基礎力診断テスト、
 ②進路マップ 実力診断テスト
 ③スタディーサポート α タイプ、 β タイプ、 θ タイプ
 ④スタディープログラム
 ⑤ベネッセ総合学力テスト
 ⑥Literas 論理言語力検定 3級
 ⑦Literas 論理言語力検定 2級
 ⑧ベネッセ数学理解力検定
 ⑨GTEC Advanced タイプ・Basic タイプ・Core タイプ

○事業概要報告

- ・実実施校数・実受検者数、1年あたり実施回数
 (非公開情報となる数値については「--」の記載としている。)

認定ツール	実施校数	利用者数	年あたり実施回数
①	510 校	157,830 人	9 回
②	1,457 校	530,566 人	9 回
③	590 校	238,344 人	5 回
④	92 校	66,313 人	6 回
⑤	3,621 校	2,877,565 人	6 回
⑥	--	--	1 回
⑦	--	--	1 回
⑧	--	--	6 回
⑨	--	--	5 回

・試験実施後の検証内容

(1) 具体的な検証方法

- ・全体・大問別・小問別の平均得点率や得点度数分布・標準偏差を算出し、想定値と比較し、その妥当性を作問者と検証。【①②③④⑤】
- ・全体・大問別・小問別の分析を行い、テストの統計的な性質(難易度、識別力、信頼性、測定の標準誤差

など)がテスト仕様で定める基準を満たしていることを検証。【⑧】

・試験の結果から複数の成績層に分けて、各成績層の平均得点率を算出し、各成績層間の得点率の差などから、学力の弁別性を検証。【①②③④⑤】

・アンケート調査あるいはヒアリング調査を行い、学校の指導状況に合致しているか等、試験内容に対する学校からの評価を確認する。【①②③④⑤⑨】

・統計指標による検証や、検証結果を基にして作問委員会と作問総括(出題意図どおりの結果だったかなど)を行う。【⑥⑦】

・古典的テスト理論の枠組みで等化を行い、その精度を統計指標(等化の標準誤差など)に基づいて検証する。【⑧】

・全体得点をグレードおよびスコアに変換し、それらの分布が過去の同一実施回の分布と比較して大きく変化していないことを検証する。【⑧】

・複数回受検者のスコア推移が適切な範囲に収まっていることを確認する。【⑧】

・「GTEC」は項目反応理論(IRT)というテスト理論に基づいて毎回のスコアを算出しているため、各問題に客観的につけられた「困難度」「識別力」が目標の範囲内かを確認する。【⑨】

・IRTで算出したスコアをもとに「度数分布」を確認する。【⑨】

(2) 具体的な検証項目・内容

・「難易度」…全体得点率が目標通りの値であったかどうかを確認し、目標値から外れた場合に、どの部分で想定外の結果であったかを検証する。【①②③④⑤⑧】

・「学力の弁別性」…大問ごとに、あるいは、小問ごとに、成績層間の得点率の差の妥当性を確認する。必要に応じて、選択式問題の各選択肢の選択率を検証することや、記述式問題においては、採点基準の内容まで振り返り、学力の差を得点差に反映できる採点基準の内容であったかどうかを検証する。【①②③④⑤】

・「出題内容の妥当性」…問題内容に関する教員の評価を確認し、学校の指導内容に沿った問題内容になっているか等を検証する。【①②③④⑤⑨】

・「難易および合格基準判断の妥当性」…合格率・スコア分布・平均正答率を算出し、問題事前調査による想定値と比較して検証する。【⑥⑦】

・「信頼性」…各項目の正答数と合計正答数との相関係数(Item-Total 相関)や、クロンバックの α 係数などの統計的指標を用いて検証する。【⑥⑦】

・「識別力」…各小問における得点と全体得点の相関係数を計算し、基準よりも低かった場合はその原因を追究する。【⑧】

・「信頼性」…内的一貫性に基づく信頼性係数が基準を満たしていることを確認する。【⑧】

・「測定の標準誤差」…全体得点に含まれる測定誤差の大きさを推定し、基準よりも小さいことを確認する。【⑧】

・「等化の標準誤差」…等化によって得られた換算式がどれぐらいの標本誤差を含むかを評価する。【⑧】

・「困難度」「識別力」…目標通りの値であったかどうかを確認し、目標値から外れた場合には、トレースライン(項目特性図)や問題内容まで振り返り、受検者の能力を適切に測定できる問題であったかを確認する。【⑨】

・「度数分布」…フィールドテストで取得した共通被験者のスコア分布および主要指標から、IRTのパラメータが精度高く推定されているか検証を行う。加えて、受検校のスコアの度数分布およびスコア度数分布の推移を確認し、妥当なものであるか確認を行う。必要に応じて、問題作成・採点・IRTの手続きにさかのぼって確認し、瑕疵がないことを確認したうえでスコアを確定する。【⑨】

・今後の改良の方向性

以下、審査会からの指摘事項と、それについての対応および改良の方向性を記載する。

○出題内容・形式の検討

・出題内容・形式を考えるにあたり、「どのような力」を測定するものなのかを定義し、出題設計を行っている。事後の検証についても学校現場にもご意見をいただきながら行っている。【①②③④⑤⑥⑦】

・学習指導要領を踏まえ、各分野における基本的な知識・技能、数学的な思考力・判断力・表現力を、複数の小問で段階的に問う出題を行っている。【⑧】

・「GTEC」は企画段階において、学習指導要領との関連性に留意して「測定する力」を技能・パートごとに決定をしている。受検者の多い実施回の後に、現場ヒアリングを行い、その結果は今後の問題制作や出題改訂にいかしている。【⑨】

○英語の「話す」技能測定

・「話す」技能測定においてUSBを用いた技術開発を行い、サービスとして提供している。更に技術開発や環境整備を行うことで、より安定的なサービス提供を実現する。【①②】

・英語の「話す」技能測定について、測定に代えて問題、採点基準を提供している。技術開発や環境整備については継続して検討する。【③④⑤】

○英語の「話す」技能測定のための運用

・実施マニュアルについては提供している。また、学校における「話す」技能の試験を実施した学校については、要望があればツールを使って分析できるものを提供している。【①②③④⑤】

○学習指導要領の趣旨や高大接続改革の方向性を踏まえた出題内容・形式

・本テストを長年にわたってご採用いただいている学校様が多くいることもあり、これまでの既存の問題を残しているのが現状だが、次期学習指導要領に沿った出題への変更に向けて研究を進めている。【①】

・これまでの既存の問題を残しているのが現状だが、次期学習指導要領に沿った出題への変更に向けて研究を進めている。【④】

○英語の出題内容

・これまでの既存の問題を残しているのが現状だが、次期学習指導要領に沿った出題への変更に向けて研究を進めている。【①④】

○結果提供への不断の改善

・学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点の重要性を鑑み、解答解説の冊子で解答に必要な考え方を明示している。(①②⑤：また、問うている学力要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」)については、受検校教員に提供している。)【③④】

・「社会理解力」も含む3領域の結果とは別に、「学びの基礎診断」(国語)としての診断結果が分かりやすいように「語彙運用力」「情報理解力」の2領域の結果を「国語力診断」として記載している。また、正答状況やスコアだけではなく、「～できる」の記述文による評価も行う。【⑥⑦】

・受検者にはスコア・グレードを返却しているが、それぞれのスコア・グレードについて、行動指標として「～ができる」という表現で要件を記している。また、受検者が取得した以外の行動指標も閲覧できるようにすることで、ステップアップするために必要な事柄が受検者自身で確認できるようにしている。【⑧】

・「GTEC」は2019年度よりCEFR-Jの指標を用いて結果を返却しているが、単に、スコアやCEFR-Jのレベルだけを返却するのではなく、該当するCEFR-Jレベルの「～できる」というCan doメッセージを提示している。【⑨】

○授業改善や学習意欲の向上に向けた結果提供の検討

・学習指導要領の趣旨や高大接続改革の方向性に適い、かつ授業改善や学習意欲の向上等に十分に資する結果提供となるよう継続して検討を行う。【①②③⑤】

○評価の考え方と分析手法

・英語4技能については、「読む」「聞く」「書く」に加えて「話す」技能についても試験実施および同社での採点・評価、結果返却を行っている。各技能について、得点率をもとに段階別(4段階)で評価を行うことで4技能バランスのとれた育成に資するものと考えている。【①②】

・英語4技能について、「話す」技能については問題、採点基準の提供をしており、観点別の段階評価、その評価観点を示したものを提供している。【③④⑤】

○試験内容の不断の検証

・実施後は、設問別・成績層別の結果データの詳細な分析も行っている。今後も不断の検証・改善に努める。【①②③④】

・各回で同一の平均点目標を設定し、難易管理の徹底を行っている。実施後は、設問別・成績層別の結果データの詳細な分析も行っている。今後も不断の検証・改善に努める。【⑤】

・統計的指標を用いて検定の信頼性などの検証を行い、安定した難易度による、生徒の学力推移を測定できるよう努める。【⑥⑦】

・数学理解力検定では、統計的な手法を用いて各検定回の難易度を等化し、正しいスコアを提供できるようにしている。また、各検定回の実施後にはデータを用いた総括を行い、安定した難易度による、生徒の学力推移を測定できるよう努めている。【⑧】

・「GTEC」は項目反応理論（IRT）というテスト理論に基づいて毎回のスコアを算出している。IRTを用いたテストでは、問題の難易度に関わらず同じ能力の受検者は同じスコアになるようにスコアを算出するが、問題の難易度が安定しているかについては、作問工程において引き続き、使用語彙、文法、タスクレベルの複雑さの観点から検証する。【⑨】

○低廉な受検料

・広く受検いただきやすい料金設定を継続して検討する。【①②③④⑤⑥⑦⑧⑨】

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

現段階では検討していないが、教育環境の変化および社会のニーズを踏まえ検討の可能性もある。【①②③④⑤⑥⑦⑧】

導入済（スピーキング技能）。【⑨】

・IRT導入に向けた展望・検討状況

現段階では検討していないが、教育環境の変化および社会のニーズを踏まえ検討の可能性もある【①②③④⑤⑧】

導入済【⑨】一部実施【⑥⑦】

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

現段階では検討していないが、教育環境の変化および社会のニーズを踏まえ検討の可能性もある。【①②③④⑤⑥⑦⑧⑨】

・その他特記事項

特になし

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

別紙の指摘事項への対応の通り

○主な質疑応答

大学の合格可能性、大学名を載せないで進路指導のコンテンツを載せるということも選択可能となっているが、大学名を表示しない仕組みを望んだ学校はどの程度あったかという点について、あまり多くないと認識している。

学びの基礎診断という観点から、学校の教育改善、フィードバックについて、帳票は先生用のものと生徒用のものを分けて提供している。先生用のものが指導改善に当たる部分になり、全体の学力の傾向やクラスごとの情報等々をフィードバック、学校の先生方に対して報告会や説明会を開いてアセスメント結果、過年度を踏

まえたデータの変動などを示しながら、今の生徒たちの傾向、学校ごとの課題を伝えている。PDCA を回す仕組みが出来上がっていない学校に向けて訪問、活用の提案を行っている。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名： ブリティッシュ・カウンシル

測定ツール名： Aptis for Teens (アプティスフォーティーンズ/中高生向け Aptis)

1. 議事要旨

○事業概要報告

・実実施校数：0

・実受験者数

0校 0人(「学びの基礎診断」としての受験者数)

・試験実施後の検証内容

「学びの基礎診断」に係る検証は、受験者が無かったため未実施。

・今後の改良の方向性

コンピューター以外での実施形態(タブレット等)を検討中。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

CBTで通常行っています。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

Modified Angoff法によってCEFRを対照しテストの難易度を保っている。

IRTを導入する予定はありません。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

導入は現在未検討。

・その他特記事項

特になし。

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>学習指導要領との関連</p> <p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<p>Aptis for Teens は、実際に英語を使用する場面に即した出題で、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」、「話すこと」における英語運用能力の測定を目的としており、新学習指導要領で求める積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や能力の測定が可能な出題設定となっています。</p> <p>生徒の資質や英語でのコミュニケーション力を測定し、学びにつなげるための継続的な研究を行っており、2020年4月以降には新指導要領と新検定教科書を参照し、Aptis for Teens の出題内容を検証する研究を始めの計画となっていました。新型コロナウイルス感染拡大等の状況で現在計画を中止しております。この研究には、日本の教員や研究者の参加を予定しています。</p>
<p>結果提供について</p> <p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。特に新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度合いを正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「～ができる」の記述文による評価を示すなどの工夫を検討することが望まし</p>	<p>Aptis for Teensは、コアパートとして語彙と文法のテストを導入し、基本的な知識と技能の定着を測定した上、オープンクエスチョン形式の出題で思考力・判断力・表現力を評価できるよう設計されています。結果は粗点だけでなく、CEFRでも表示されています。CEFRのディスクリプターを結果とともに提供することで、「～ができる」英語力であるかを理解し、次の学びにつなげていただけるようにしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 受検者個人 学校を通じて紙媒体と電子データによって結果を提供していますが、具体的な学習のアドバイスや復習問題などの掲載は未だありません。今後検討を続けていきます。 • 学校等 学級・学年別の概況・分析結果—平均点、得点分布、全体及び領域等毎の評価の分布、経年変化などの結果を紙媒体と電子データで提供をしていますが、課題が多く見られた分野や誤答類型に基づいた指導のアドバイスや復習問題の掲載はありません。今後検討を続けていきます。

<p>い。その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行うことが望ましい。また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」などの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。</p>	
<p>運営その他に関すること</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 試験内容の不断の検証 2. 低廉な受験料 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 弊機関のリサーチチームと外部研究者により、継続的に信頼性や測定内容の妥当性の検証を行っています。検証の内容は弊機関ウェブサイトにて公開をしています。 https://www.britishcouncil.org/exam/aptis/research/publications また、採点の質を担保するため採点官の定期的なモニター、指導と研修も行っています。 2. 受験者数に応じた受験料の設定や、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を、学校と連携して行います。

○主な質疑応答

CBTにおけるタブレットでの実施について、現場の先生方の負担を考慮し、現在、専用のタブレットを開発している。タブレットに問題を落とし込み、解答もそこに保存可能であり、生徒が解答したデータがなくならないような形で回収し、採点に回すというようなシステムを開発している。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：ケンブリッジ大学英語検定機構

測定対象ツール：ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools、

ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

1. 議事要旨

○事業概要報告

・実実施校数・実受験者数

「高校生のための学びの基礎診断」測定ツールとしては、いずれも採用なし

・試験実施後の検証内容

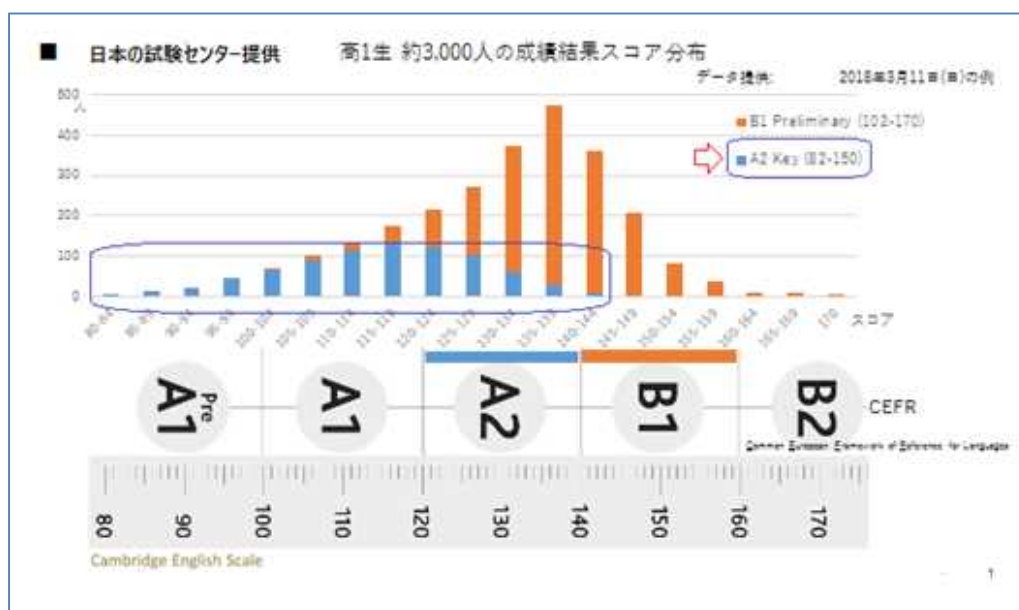
■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

高校生約 3,000 名の Cambridge English スケールスコアのスコア分布から検証。

2018 年 3 月 11 日(日)に実施した A2 Key for Schools を数十の高校が同日、A2 Key または B1 Preliminary を選択して受験。

2つの試験のスコア分布を積み上げても滑らかな正規分布に近いことが分かる。

例えば、Cambridge English スケールスコア 125 の生徒は2つの試験のどちらを受けても同じ125になる設計がケンブリッジ英語検定ではできている、ということが視覚的にも分かる。



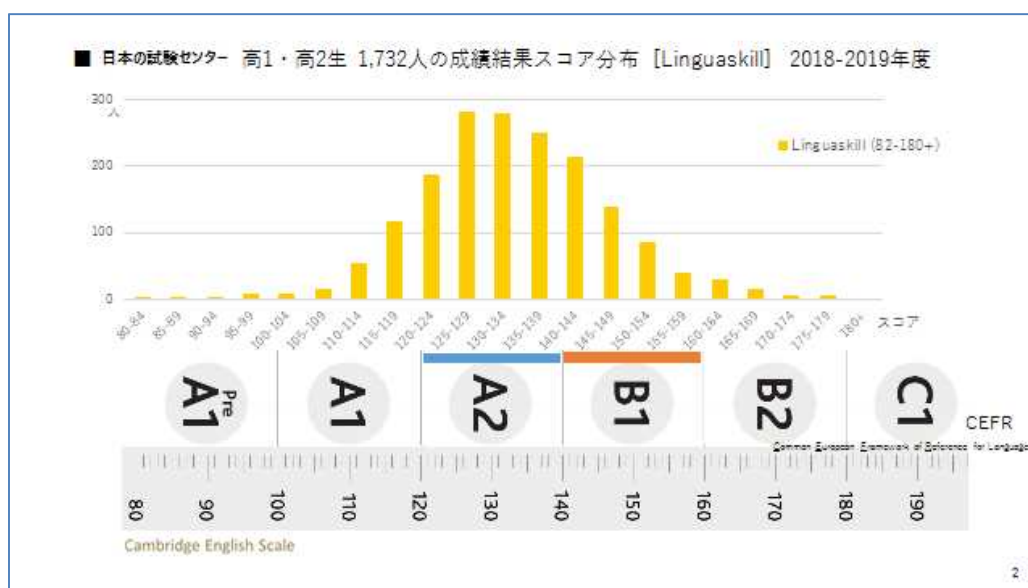
その他、第三者による評価として ALTE（ヨーロッパ言語テスト協会）による監査あり。
5年に1度行われる監査で、A2 Key for Schools を含む全てのレベルのケンブリッジ英語検定について、ALTE の基準をクリアしている品質を保証する「Q マーク」が2018年に継続して付与された。



■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

2018-2019 年に全国で数十の高校(離島を含む)から 1,732 名の成績スコアデータを集計したスコア分布から検証。

測定レベルの範囲は Pre A1~C1 以上(スコア 82-180+)でスコア分布(スコア刻み 5)は A2 Key for Schools など通常のケンブリッジ英語検定と同様に、滑らかな正規分布に近いことが分かる。棒グラフに欠損もないことから、試験としての識別性が高いことが推察される。



また、当機関は第三者評価として、Ofqual（イングランド政府の教育・資格の質評価に関する監督機関）による監査も受けている。

・今後の改良の方向性

■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

コロナ禍に対応するスピーキング試験のデリバリー方法が検討されている。即実現は難しいが、継続して実現可能性について話し合いを重ねて行く予定。

■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

上限の測定可能な範囲が、2021年までに現在の「C1+」より C2 まで拡がる予定。

また、遠隔試験監督システム付きの試験として、専用の提供会社のサービスを活用中だが、今後は統合型（内蔵型）としてオプションで提供できるよう開発が進んでいる。これにより、CBT センターや学校の PC ルーム等の会場型受験から、高セキュリティのもと、個別型受験（自宅受験含む）が可能になる。

・ CBT での実施に向けた展望・検討状況

■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

少数だが CBT での実施あり。ただし、CBT 版でもスピーキングテストは PC に向かって話すのではなく、対面式テストとなる。

■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

- ・ CBT。インターネットのある環境であれば実施可能なオンラインテスト。
- ・ 専用の CBT 試験センター（都内、千駄ヶ谷）の他、学校を会場とする自校開催も実施中。

・ IRT 導入に向けた展望・検討状況

■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

両試験ともに既に導入済み。項目応答理論（IRT）に基づいたラッシュ・モデルを使用し、出題する問題が同じ尺度上に載るように調整したアイテムバンクを構築して活用。

・ 適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

適応型テスト導入検討はなし。

■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

リーディング&リスニングのモジュールは適応型テスト。アイテムバンキングシステムを用いて出題。

・ その他特記事項

■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools

特記事項：なし

■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)

AI が自動添削をする Write & Improve、英会話力の練習を手伝う Speak & Improve を無料で提供中。中高生が利用しやすいように、公式アカウント LINE スタディ「ケンブリッジ英語検定」を 2020 年 4 月末に開設。リンガスキルのライティングとスピーキングテストの練習問題として、LINE アカウントを通じて役立つ機能・情報を無料で提供中。

○指摘事項への対応

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしながら、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<p>■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools</p> <p>令和2年1月22日付けの事務連絡において、回答依頼のあった「指摘事項」に対する対応状況について令和2年2月7日に文書で回答済み。</p> <p>ヒアリング調査の際、以下の点につき改めて報告させて頂いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・測定したいスキルが正しく測定できているのか、世界中の現場の先生や専門家からのフィードバックを活かし、2020年1月に改訂版が導入された。「英語学習の低年齢化により、従来よりも出来栄の良い生徒の存在」が教室において珍しくない現状に接し、そうした優れた生徒を含め、教室でのモチベーションを維持、向上させるため、生徒の能力を CEFR レベルで正しく反映することができるように、スピーキングおよびライティング・テストで測る機会を増やした。 ・【改訂された点】スピーキングテストでは、即興性が求められる「やり取り」や「流暢さ」のスキルにフォーカス。 改訂前) 受験者2名が質問役と応答役のそれぞれを担う質疑応答形式 改訂後) 「やり取り」に必要な即興性等のスキルを測定。受験者二人が協力して取り組むタスクベースの出題へと改訂 ・ライティングテストでは、英作文を1題追加し、計2題に。各問題の必要語数の上限をなくした。 1. 改訂前) 25-35 語 → 改訂後) 25 語以上
<p>同上</p>	<p>■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)</p> <p>2019年10-12月に無料トライアルテスト(ライティング、スピーキング)をグローバルに実施、日本でも約250名の高校生が参加。現場での気付きについてフィードバックいただき、今後の開発の一助とさせて</p>

	頂いた。(トライアルを通じて初めて当テストを体験した高校の先生から「(生徒から)大変好評」との感想あり。)
できるだけ多くの生徒が受験しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受験料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。	<p>■ケンブリッジ英語検定 A2 Key for Schools (受験料は各試験センターが設定する裁量を有する。そのベースとなる各試験センターが弊機関に作問・試験資材費として支払う費用について) グローバルには受験料は毎年数パーセント値上がりが続く中、コロナ禍の特別措置として 2021 年 7 月まで据え置き設定。</p>
同上	<p>■ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル)</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開会場の場合、予価 9,000 円 (税込)。 自校実施割引の場合は 7,200 円~でご提供の可能性あり。ただし、遠隔地の学校の場合、試験監督の派遣費用が別途掛かることあり。 <p>大学生・社会人対象のビジネスパーソン向けのリンガスキル(Linguaskill ビジネス) は例えば 4 技能セット価格で 11,900 円。高校生対象のリンガスキル (General) はより利用しやすい額を設定。</p>

○主な質疑応答

1 教科の価格として試験の価格が高額ではないか、為替関係等で変わることはないのか、という点について、受験料は通常、試験センターが弊機関に支払う費用(作問、試験資材、採点、認定証発行等)の他、現地で発生する費用を勘案して各試験センター毎に設定されている。

・スピーキング試験では、2名の試験官を要する。1名は質問役および全体評価を行う試験官、もう1名は会話には加わらず、採点のみ行う試験官であるが、どちらも教員としてのバックグラウンド(指導歴)、グローバルに通用する英語教授法認定の有資格であること、学士号以上など、試験官の有資格者は質が高く自ずと限られたリソースとなり、報酬も相当となる。

・公開会場費も交通至便な場所では相当な金額となることが多く、たとえ円高となってもローカルコストであるため全体の費用の減額はできず、その恩恵をエンドユーザーが感じるができない理由と思われる。

一方、ケンブリッジ英語検定 4 技能 CBT (Linguaskill リンガスキル) は、近い将来すべて AI が採点できるようになると、採点に人件費がかからない分、どの程度受験料に反映できるのかについて注視している。現時点では、スピーキングテストについてハイブリッド採点(AI と採点官)で行っている。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」

(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：株式会社教育測定研究所

測定対象ツール：英検 IBA テスト C

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

0校 0人

・試験実施後の検証内容

昨年度の実績報告は実施学校数としてはゼロ校、受検者数もゼロ名のため未実施です。

・今後の改良の方向性

現在の英検 IBA 4 技能版は、試験時間が長く授業の1コマの中で受検を終えられないため、学校現場の授業のコマを有効活用しながら実施することが難しい実態がある。今後は学校授業のコマを活用した運用の御提案に取り組む予定です。

・CBT での実施に向けた展望・検討状況

英検 IBA のスピーキングテストはタブレットを貸し出し、実施する形態です。運用上のハードルの1つである CBT 環境は、CBT 化することで PC 教室やテストセンター、自宅での実施が可能になり、英検 IBA 自体の実施はより運用しやすくなる。現在、日本英語検定協会と英検 IBA の CBT 化検討を進めています。能力を可視化するテストだけではなく、PDCA サイクルにつなげるという観点においては、日本英語検定協会公式認定教材「スタディギア for EIKEN」(e ラーニングサービス)と併せて学習と測定の PDCA サイクルを学校現場に引き続きご提案いたします。また、その他にも漢字能力検定協会、数学検定協会の公式 e ラーニングサービスを 2021 年春公開予定です。2021 年度は英語だけではなく国語・数学も含めた 3 教科セットとして学校現場により広く学びの基礎診断の理念を広げる予定です。

・IRT 導入に向けた展望・検討状況

英検 IBA 自体が IRT に基づき設計されたテストのため、年度最初のプレイズメントと年度終了時のアチーブメントとでの能力向上や、学年をまたいだ経年変化を可視化できる。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

英検 IBA 4 技能版の CBT 化検討を進める中で、CAT 型を前提とし英語検定協会と協議しております。CAT 化が実現すれば、1 コマの授業時間内で 4 技能を測定でき、学校現場の方々は英検 IBA を使用した英語能力の可視化が容易になる。2021 年度の早いタイミングで実現すべく検討を進めていく。

・その他特記事項

高校生を主眼にしつつ、広く英語能力普及と学びの基礎診断の基本理念である PDCA サイクルの構築については、小学校、中学校を含めて当社としては広めていく。GIGA スクール構想の加速はこれらをより広めやすくなる環境を国に整備していただいていると考えており、その流れに乗り利用を拡大する予定です。

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p> <p>診断結果によって学習の成果や課題が確認でき、事後の学習改善や教師による指導の工夫・充実に資するよう、以下の取組例も参考にするとともに、学校現場のニーズも十分に踏まえつつ、結果提供について、不断の改善に努めることが望ましい。</p> <p>特に、新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、学習内容の定着度合いを正答状況やスコア等によって示すにとどまらず、全体及び領域等毎の「～できる」の記述文による評価を示すなどの工夫を検討することが望ましい。</p> <p>その際、可能な限り学習指導要領に沿った評価を行うことが望ましい。</p> <p>また、「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力」な</p>	<p>・「英検 IBA TEST C 4 技能版」の問題は、学習指導要領との関連に配慮して資質・能力を測定できるよう設計しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結果提供の具体的な内容については、「英検 IBA TEST C 4 技能版」には、CSE スコア、英検級レベル測定、Can-do、得意分野・不得意分野など豊富な情報を掲載しています。また、英語学習の動機づけのため、判定された級レベルに見合った英検の出題例なども掲載しています。学校向けには団体成績表を提供しており、団体成績表には、スコアの平均点、スコア分布図や英検級レベル別人数分布図など、英語指導に役立つ情報を掲載しています。 ・結果提供の具体的な方法は、成績資料は専用 WEB サイト(英検ウェブサイト上の団体責任者・先生用ログインサービス)から PDF 形式でダウンロードできます。また、英検 IBA のウェブサイトでは、学習者向け、指導者向けに、成績表の活用例を詳しく紹介しています。

<p>どの観点別の評価を実施する場合には、各設問が、新学習指導要領の指導事項に記載されている「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等」のいずれを問うているのかの基準・考え方が分からなければ、当該評価が信頼に足るものなのかを判断し得ないことから、学校現場に何らかの形で判断材料を提供することが望ましい。</p>	
<p>高校生の基礎学力の定着を目的とする基礎診断制度の趣旨に照らすと、生徒の学力の推移を可能な限り正確に把握することができる必要がある。このため、単に経験則によるのではなく、統計的指標などを用いて各回の試験で難易度が安定しているか否か（信頼性）の検証や測定内容の妥当性をテスト理論の観点から行うなど、不断の検証・改善に努めることが望ましい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 試験内容の検証は、「英検 IBA TEST C 4 技能版」の問題は、回答状況を統計的に分析し、質的な検証をおこなったうえで出題しています。
<p>できるだけ多くの生徒が受検しやすくなるよう、基礎診断として求められる要件や、有することが望ましい機能とこれらに係る経費とのバランスを踏まえながら、受検料についてできるだけ低廉な価格設定とすることに加え、経済的に困難な事情にある生徒への配慮を行うことが望ましい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受検料は、学校側での試験実施などを通じ、コストを抑えることにより、受検者への負担が過大とならないよう配慮しております。

○主な質疑応答

認定後の学校へのアプローチについて、英検のホームページ上で認定を受けた告知し、通常の英検を利用いただいている学校に、英検を介して周知をとというのが一つ。CASEC という独自の CBT を提供している高校に対して英検 IBA を紹介している。

以上

「高校生のための学びの基礎診断 認定事業者 ヒアリング概要」
(令和2年10月30日「高校生のための学びの基礎診断」の認定に関する審査委員会(第1回))

事業者名：公益財団法人日本漢字能力検定協会

測定対象ツール：文章読解・作成能力検定 準2級・3級・4級

1. 議事要旨

○事業概要報告

・実実施校数・実受検者数

265校 15,364人 ※年2回(6日程)実施

・試験実施後の検証内容

成績確定後、フォーム全体及び大問、小問ごとの正答率、ダミー選択肢の誤答率をまとめ、監修者と作問担当チームで検証し、作問検討会にフィードバックしている。客観的な統計指標による検証は2020年度から試験的に実施している。

・今後の改良の方向性

2019年度第3回検定(2020年1月、2月実施)より、実施した高等学校にアンケート調査を実施した。本ツールによって「育成したい能力は何か」「出題内容に関する要望」「能力測定ができていないか」を調査し、15校から回答を得た。「出題内容に関する要望」は1校だけであり、内容は「ビジネス向けの出題」を希望するというものであった。「能力測定ができていないか」についても全団体で好意的に評価された。

・CBTでの実施に向けた展望・検討状況

検討している。現時点では複数のテスト業者と打ち合わせを行って情報を収集している状況である。

・IRT導入に向けた展望・検討状況

現時点で進んでいない。

・適応型テスト導入に向けた展望・検討状況

現時点で進んでいない。

・その他特記事項

特になし。

○指摘事項への対応（指摘を受けたものについてお答えください。）

指摘事項	対応状況
<p>新高等学校学習指導要領において、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」という視点が重視されていることも踏まえ、出題内容・形式を考えるにあたっては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領との関連にも留意しつつ、どのような資質・能力を測定しようとするのか ・その資質・能力を測定するには、どのような出題内容・方法が適切かを明確にしなが、検討することが望ましい。 <p>また、これらの観点での事後検証を行う際には、学校現場の意見も十分に踏まえて行うことが望ましい。</p>	<p>[測定する資質・能力に関して]</p> <p>『思考力』『表現力』を測定することを目指している。</p> <p>[出題に関して]</p> <p>上記資質・能力を測定するために、図表読解や意見文等の問題を出題している。</p> <p>[事後検証に関して]</p> <p><input type="checkbox"/>作問担当による教員ヒアリング 作問を担当する部署の担当者が、直接学校を訪問し、国語科の先生方から指導上の課題や出題内容についてのヒアリングを行った。今年度は、公立・私立を合わせて15校（文章検未実施校を含む）を訪問した。</p> <p><input type="checkbox"/>アンケート調査の実施 2019年度第3回検定より、文章検実施校に対して、先生方の指導上の課題や注力ポイント、結果資料の内容について、継続的にアンケート調査を実施している。</p>

○主な質疑応答

CBT化する場合、漢字を含む回答方法の考え方について、CBT化した際はキーボードで文章を打ち込むことを想定しており、漢字記述能力が変換能力に取って代わることになる。本ツールがどのような能力を測定するのかを再検討する中でCBT化した際の漢字を含む回答方法について検討する。

以上